自然体験活動に参加した不登校児童・生徒の内的変容過程

―継続参加児のバウムテストの分析―

岡本祐子・奥田紗史美・尾方 綾・神谷真由美・
菊池由莉・山本彩留子・上手由香・宮崎愛弓

A continual analysis of baum-tests by school refusal students joined in a nature activities program

Yuko Okamoto, Satomi Okuda, Aya Ogata, Mayumi Koya,
Yuri Kikuchi, Satoko Yamamoto, Yuka Kamite, and Ayumi Miyazaki

本研究は，自然体験活動プログラムに参加した不登校児童・生徒を対象にバウムテストを実施し，その内的体験と変化のプロセスを検討した。特にプログラムに継続参加した児童･生徒の時系列に沿ったバウムの変化を分析し，自然体験活動が自我の発達に及ぼす影響について考察した。対象児のバウムの特徴から，不登校児童･生徒が，年齢よりもかなり①自我の発達が未熟であること，②活力が乏しいこと，③自我が不安定であることが推察された。また，バウムテストを継続実施した 7 事例の時系列にそった変化を分析した結果，変化の方向性は必ずしも一定ではなく，ポジティブな特徴が増大した事例，逆に縮小した事例，変化が微細な事例などが存在した。また，思春期特有のテーマが見出された事例も存在した。本研究から，不登校児童・生徒に関して，一般的な心理的発達基準ではなく，それぞれの心理的発達に沿ったサポートやケアが必要であることが示唆された。また，そのためのアセスメントのツールとして，バウムテストが有効であることが示唆された。

キーワード：不登校，自然体験活動，内的体験過程，バウムテスト

問題と目的

文部科学省は，不登校児童・生徒を「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しない，あるいはしたくともできない状況にあるため年間 30 日以上欠席した者のうち，病気や経済的理由による者を除いたもの」と定義している。平成 23 年度文部科学省学校基本調査によると小中学生の不登校児童生徒数は約 11 万 7 千人となっている。前年度比で約 2 千 5 百人，2.0％の減少が見られるものの，依然として多くの児童生徒が不登校となっている。不登校になったきっかけと考えられる状況については，学校に関する状況の中では，「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が最も多く，家庭に関する状況の中では，「親子関係をめぐる問題」が 1 番多い。本人に関わる状況の中では，「不安など情緒的混乱」が最も多く，その次に「無気力」が続く結果となってい

る。

近年，不登校への援助を目的として行われている活動のひとつに，キャンプなどの自然体験活動の実践がある。成長期にある子どもたちにとって山や海という自然の中で生活することや，その中でさまざまな年齢の人たちと，森遊び，ウォーキング，料理，工作等の活動を行うことは，心の発達にとって大きな意味を持っている。それは自然そのもののもつ生命観や成長・変化を味わい，自分の五感で感じたことを大切にし，自己感覚を育むことなど，自然にふれることの少なくなった現代の子どもたちにとっては，ふだんの生活環境では体験できない重要な意味があると考えられる。

筆者らは，文部科学省と A 県が実施する，不登校生に対する自然体験活動プログラム (以下，プログラムと略記) にスタッフとして 3 年間かかわった。このプログラムは，不登校などの悩みを抱える児童・生徒に対して，宿泊を伴う共同生活による体験活動を提供することで，意欲を育み，自主性や主体性を培うための支援を行うことを目的としている。毎年 9 月から翌年 2 月まで，月 1 回 2 泊 3 日の活動を半年間継続し，毎回 10〜20 名程度の子どもが参加している。ボランティア・スタッフとして大学生が 20 名程度登録されており，事業における子どもへの支援を行っている。参加する子どもは小学 1 年生から中学 3 年生までと幅広く，さらにはこの事業の卒業生として高校生が参加することもある。実施中はボランティア・スタッフと子どもで構成される活動班を作り，プログラム中は基本的にこの活動班を単位として活動が行われる。

これまで，登校行動と投映法の関連について，いくつか検討がなされている。津田 (1992) の研究では，不登校児童にみられるバウムテストの特徴を明らかにしている。また，バウムテストの特徴によって，予後を予測することの可能性を示唆している。川原・田中・二宮・玉井・寺嶋 (2006) は，不登校状態を呈して小児科あるいは精神科を受診した小学 6 年生から中学 3 年生の児童・生徒 37 名を対象に，起立性調節障害を伴う不登校児と伴わない不登校児のバウムテストを統計的に比較検討した。起立性調整障害を伴う不登校児は筆圧が弱く，活気に乏しく自己抑制的であること，起立性調節障害を伴わない不登校児は，用紙左側で切断された木を描き，頻回な抹消を繰り返し，依存的で，不安が強いことが明らかにされている。田山 (2008) では，中学 1 年生 37 名を対象に，登校行動の良好な生徒と不良な生徒の特徴の違いを，質問紙とバウムテストを用いて検討した。その結果，登校行動が不良な生徒が描くバウムテストは，筆圧が弱く，角ばった樹冠を描くことが示され，抑うつ感，不適応感，保守傾向が強く，神経過敏である可能性が示唆されている。

バウムテストは，対象者が描く樹木画からその個人の心理状態や性格傾向等を判定する投映法の一つであり，1949 年にスイスの Koch がその基本的文献として『Der Baumtest』を発表したことに始まる。日本では，1960 年に京都市内の精神病院の精神科医によって着目され，次々と学会に研究発表をしたことに始まり，1970 年に林・国吉・一谷によって Koch の英語版が邦訳されたのを 1 つの契機として，急速に臨床の世界に普及していった (津田, 1992)。

地面に立ち，成長し，常に自らを生成しつづけることなど，木と人間はさまざまな共通点をもっている。それらは，人間の心の性質と共有する点も多い。また，木に季節の変化を感じたり，木登りをしたり木陰に集ったり，木は私たちの日常生活に根付いたものであり，木と人間は古来，豊かな関係を持ってきた。高橋・高橋 (1986) は，“樹木画テストにおいて『木』を描くように求められ

た時，被検者はこれまで見てきた多くの樹木の中から，自分に最も印象的であったり，自分が最も共感できたり，自分と同一化できたりした樹木をまず心に思い浮かべる。次いでこのイメージ化された木を自分自身の内的感情や欲求によって，無意識裡に変容させ，被験者にとっての特有の木として描くのである。したがって樹木画テストで描かれた木は，主に被検者が自分自身の姿として，無意識のうちに感じているものを示し，被検者の基本的な自己像を表すことが多い”としている。

このように,「実のなる木を描いてください」というシンプルな教示によって描かれた木に，描いた人の心・自我・人格が投映されるという理論にもとづいて開発されたのがバウムテストであり，心理臨床の場で広く用いられている。参加児の描く木には，彼／彼女たちの自我の本来の姿が投映される。里山の中で木 (＝自我) が成長するイメージから，自然体験活動に参加することによる参加児の心の発達をとらえることは可能であろう。

そこで本研究では，上記の自然体験活動プログラムに参加した不登校児童・生徒を対象にバウムテストを実施し,その内的体験と変化のプロセスを検討した。特にプログラムに継続参加した児童・生徒の時系列に沿ったバウムの変化を分析し，自然体験活動が自我の発達に及ぼす影響について考察した。

方法

1. 対象者

プログラムに参加した児童･生徒 15 名。そのうち，4 回の面接調査すべてに参加した児童･生徒は 7 名であった。対象児の保護者には予め，本研究の目的，方法，結果の公表の仕方について文書で説明し，書面・捺印にて研究協力の承諾を得た。

2. 調査時期

X 年 8 月から X+1 年 2 月の間に企画されたプログラム 6 回のうち, 第 1 回 (8 月), 第 3 回 (10 月), 第 5 回 (12 月)，第 6 回 (2 月) の計 4 回。

3. 手続き

現地において参加児に，以下の内容について個別面接とバウムテストを行った。面接は 1 名につき約 20 分程度，以下の内容について質問した。

①プログラムに参加した感想，②自己肯定感，自主性，自律性，がんばり，対人関係･コミュニケーション等について，小･中学生にも理解できる言葉で，具体的に着眼点を添えて質問し，できるだけ自由に話してもらった。その後，バウムテストを実施し，描画後の質問を行った。バウムテストは,「実のなる木を 1 本描いてください」という教示により，B5 判の画用紙に鉛筆ならびに消しゴムを用いて実施した。

4. 分析の手順

①個別面接の内容は，終了後，直ちに詳しい記録を作成した。

②バウムテストは，標準化された分析の基準にしたがって，自我の強さ，発達レベル等についてアセスメントを行った。

③その後，個々の参加児の変化を時系列にしたがって分析した。

結果と考察

1. 自然体験活動プログラムの受けとめ方

個別面接調査の分析の結果，以下の点が示された。

①ほとんどの参加児は，自然体験活動プログラムを楽しみにし，肯定的に受けとめている。

②全般的に参加児は，家庭とプログラムでの意識や気持ちのギャップが大きい。

③プログラムは，親との摩擦のない，ありのままの自分が体験できる場ととらえている者が多い。

2. 面接調査から理解された対人関係と内面的特性

面接調査から対象児の対人関係と内面的特性として，以下の点が示された。

①家庭生活は，昼夜逆転の生活，ゲームがほとんど唯一の楽しみ，親からの圧力によるストレスが高いなど，問題が多くみられた。

②多くの参加児は，対人関係が非常に苦手である (人と一緒にいる／話すのは疲れるという反応が多い)。

③面接者に対してもほとんど言葉を発せられないか，短く返答する子どもが多かった。

3. バウムテストから読み取れる特徴

(1) 全体的特徴

延べ 39 名の参加者の 39 枚のバウムから，以下の 3 つの特徴が見られた。

1) 自我の発達の未熟さ：①木が小さい。②太い幹と輪郭だけの樹冠。③棒人間，鳥などの付属物が描かれている。④先端が切り取られた木，など。

2) 活力の乏しさ：①木が小さい。②筆圧の乏しい，か細い線。③枝のような幹。④枯れたように見える木。⑤下へ垂れ下がった枝，など。

3) 自我の不安定さ：①幹が曲がっていたり傾いて倒れそうな木。②くねくねした枝。③幹の先端が開きっぱなしの木，など。

全般的に，年齢よりもかなり①自我の発達が未熟であること，②活力が乏しいこと，③自我が不安定であることが推察された。

(2) 継続参加児の分析

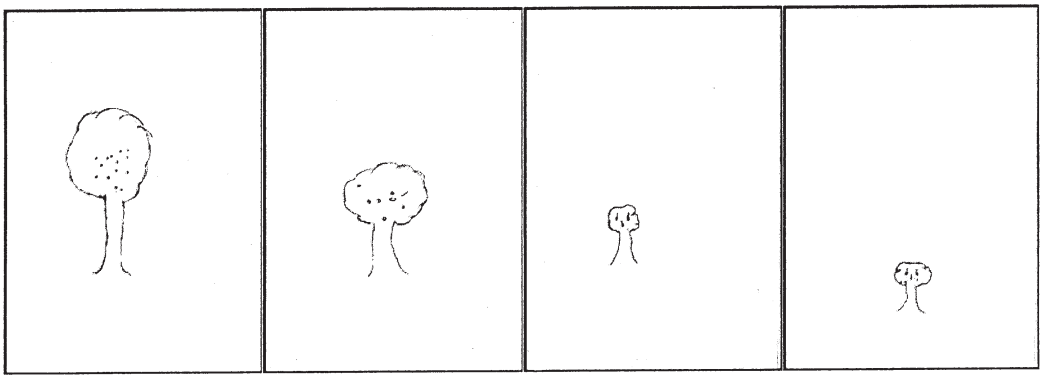
4 回にわたってバウムテストを継続実施した 7 事例の時系列にそった変化を分析した。各事例のバウムテストを呈示する。なお，以下に呈示するバウムテストは全て，個人情報保護のため，実際のデータに沿って再現したものである。再現にあたっては，描画のもつ印象が失われないように注意し，細部は変更している。

<u>事例 1 (小学校高学年，男子。Figure 1)</u>

事例 1 の第一の特徴は，4 枚全てにおいて「弱い筆圧」である。高橋・高橋 (1986) によると，筆圧は被験者の精神的エネルギー水準を表しており，薄くて弱い筆圧は，不安，ためらい，自己抑制，無気力，恐怖，抑うつ感などを示すことが多い。また，サイズについては，1 回目から 4 回目にか

けて，徐々に木の大きさが縮小している。4 枚目では，それまでやや中央に近かった縦位置も下がっている。高橋・高橋 (1986) は「中央下に描かれた小さい木」について，無力感と抑鬱感が目立つとしている。

以上より，事例 1 は，全体としてエネルギーに乏しいと言える。また，4 回の継続実施を行う中で，さらにその特徴は顕著になり，貧困化し，明らかに自己イメージが縮小していると言える。田山 (2008) は，登校行動不良群のバウムテストの特徴の 1 つとして，筆圧の程度と変化，つまり，樹木を描画するにあたって筆圧が薄い・弱い・細い・軽いという，鉛筆使用時のエネルギーの小ささを挙げている。事例 1 については，不登校児童・生徒のバウムの特徴をよく表していると考えられる。



1 回目　　2 回目　　3 回目　　4 回目

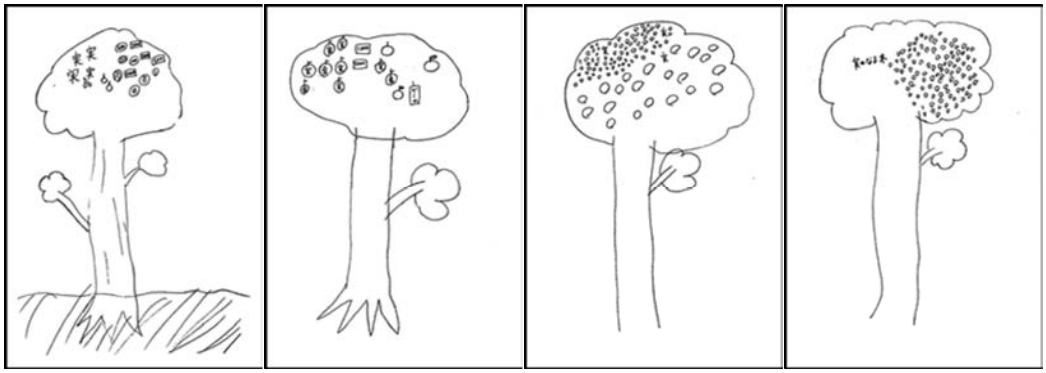
Figure 1. 事例 1 のバウムの経過 (再現)

事例 2 (中学生，男子。Figure 2)

事例 2 は，4 枚通して筆圧は強く，サイズは大きい。しかし，幹の太さや長さに対して樹冠がやや小さい。樹冠と幹の長さの比率は重要な発達の指標の 1 つであり，幼児は樹冠に対して幹が長く，年齢とともに幹の長さが減少することが示されている (Koch, 1957 岸本他訳 2010; 山下, 1982)。そのため，事例 2 の場合，実年齢からみて，情緒的な発達の未熟さが認められる。また，1 回目と 2 回目では，同じ木の樹冠の中に様々な種類の果実を描いたり，果実以外にお金の絵を描いたり，文字で「実」と書いたりしている。“樹冠の中に野菜を描いたり，人形や事物を描くのは，子供の樹木画によく見られるので，幼稚性を表している。このような樹木画は子供が得たいと思っている事物についての空想を表すことが多い”とされている (高橋・高橋, 1986)。願望や空想をそのまま表出するという点からは，象徴化機能にも苦手さがあると考えられる。一方で，3 回目以降では，樹冠の中から具体的な物がなくなり，ただの丸を大量に描き，その中に文字で「実」や「実のなる木」と書いている。ある程度抽象化した表現へと変化しているとも考えられる。また描画後の質問において，1 回目では「海に流されていた」木が，2 回目では「無人島」に流れ着き，地面に根を下ろし，やや安定したイメージが投影されている。しかし 3 回，4 回では「どこかそこらへん」に生えているとしており，根もなく，幹が下方で開放している。高橋・高橋 (1986) によると，幹の根元が不

明確で根も地面のラインも描かれていない樹木画は，拠り所のない不安や自身の欠如を表すことが多い。対象者がすぐに安定した居場所の感覚を獲得することは難しいと思われる。

以上より，事例 2 は，情緒発達に未成熟な部分があると考えられる。回を重ねるごとに具体的な表現から抽象的な表現が可能になりつつあるが，そうすることによって安定感や現実感が乏しくなっていると見ることもできる。岩宮 (2009) は，“思春期は，この世での自分の「生」とは何なのかという問いにぶつかる時期である”とし，“このような問いに向かいあうということは，日常的な理とはまったく異なった超越的な世界が，自分の「生」や日常的な生活とどう関係しているのかと模索していくプロセスだともいえるだろう。(中略) 自分の生きている世界を，日常的なレベルを超えてどうイメージし，その中に自分をどう位置づけていくのか，そしてそこで新たな座標を獲得した後で，それをまた日常とどう結びつけていくのかという「超越」を含んだ問いにぶつかるのが，思春期のテーマのひとつなのである”と述べている。また，“このような問いが訪れることによって，今までシンプルだった子どもとしての世界観が揺らいでくると，どんなにしっかりとした家族に守られながら育っていても，否応なく困難な状況に陥ってしまうこともある”としている (岩宮，2009) 。事例 2 について，4 回のバウムテストの経過を，具体的な世界から超越的な世界への移行といった，思春期のテーマと捉えて検討することも可能であろう。



1 回目　　2 回目　　3 回目　　4 回目

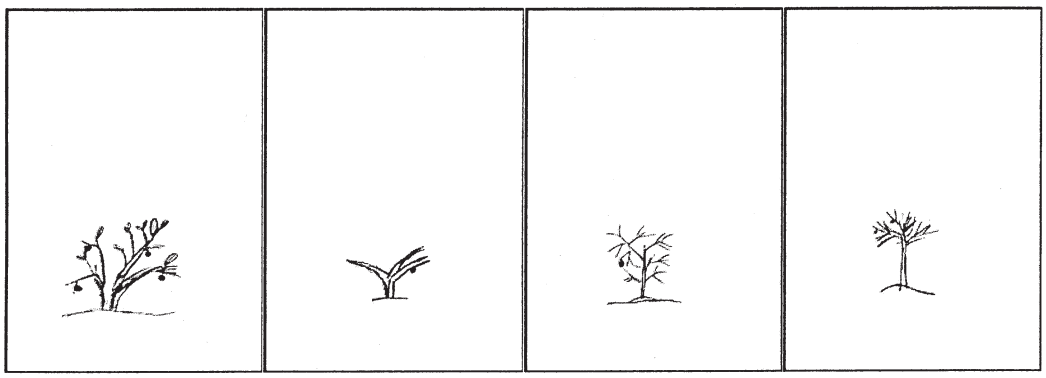
Figure 2. 事例 2 のバウムの経過 (再現)

<u>事例 3 (中学生，男子。Figure 3)</u>

事例 3 は，4 枚全てにおいて「中央下に描かれた小さい木」であり，活力が乏しい印象である。また，筆圧は弱くはないものの，破線で描かれている。高橋・高橋 (1986) は，“強い筆圧の直線で短く雑なラインは，興奮しやすく衝動的な人に生じがち”としており，事例 3 の描くラインは，特に 2 回目まではこの特徴に近いと言える。衝動的な一面も持っている印象である。また，それぞれの木が「木」としての体をなしておらず，描画の歪みが顕著である。1 回目は完全に幹先端が開放している。幹を示す線がそのまま枝となっているが，幹の太さは辛うじて保たれている。高橋・高橋 (1986) は，このようなバウムを「分離した幹」とし，理性的判断と感情の均衡が失われていたり，自我の境界が曖昧な状態になっていることを示すとした。その後，2 回目は全体的に萎縮し，上か

ら抑えられたような形をしているが，3，4 回目は，サイズは小さく筆圧は薄いながらも，「木」としてのバランスが回復しつつある。幹も枝も，か細くはあるが 2 元的に描かれ，幹の太さを保とうとしている。また，事例 3 は 1 回目から「地面」を描いているなどの健康的な指標も認められる。

以上より，事例 3 は，衝動のコントロールが未成熟であり，外界からの侵襲を受け，抑圧されているという感覚を持っていると考えられる。しかし，それを徐々に枝によって閉じ，しかも幹の太さを保ったまま「木」としてのバランスを回復しようとする試みが読み取れる。しかし，内的なエネルギーの弱さは顕著であると言え，また，不適応の指標とされている「分離した幹」が見られたことからも，今後の経過を注意深く見守る必要のある事例である考えられる。



1 回目　　2 回目　　3 回目　　4 回目

Figure 3. 事例 3 のバウムの経過 (再現)

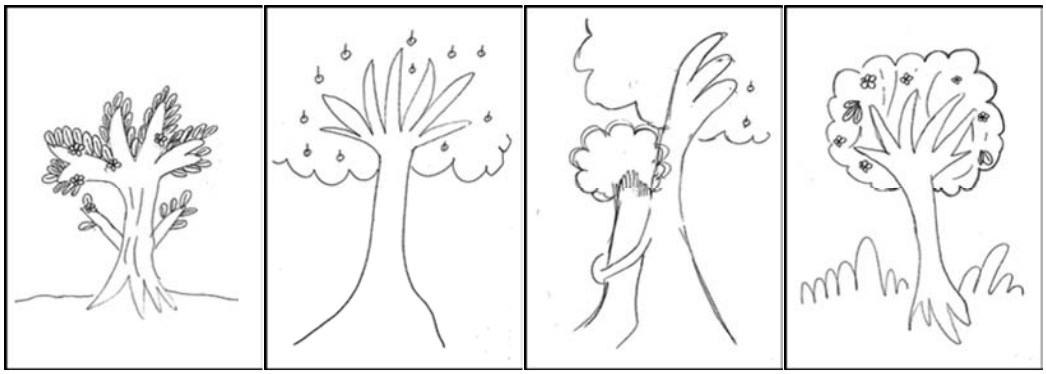
事例 4 (小学校高学年，女子。Figure 4)

事例 4 は，1 回目から 4 回目までの変化が顕著である。まず 1 回目では，枝が歪曲しており，その後のイメージも「切られてるかも」とネガティブである。高橋・高橋 (1986) によると，「滑らかに曲がった枝」は，自己の精神的エネルギーを円滑に通わせることに努力していることを示す。また，葉が枝に張り付いているように描かれており，表面的に適応しようと，自身を装飾しているような印象である。2 回目になると一気に拡大し，上下とも画用紙に収まりきれていない。高橋・高橋 (1986) によると，「大きいサイズの木」は，自己顕示，自己拡張，高揚した気分を示し，樹木の一部が用紙からはみ出て，用紙で切断されたような樹木画は青年期前期の被験者にかなり多く見られる。以上から，全体として自己イメージは肥大傾向にあると思われる。

3 回目では，大きな木が，それよりも少し小さな木を抱いているようなバウムを描いている。大きくなった「一つ」は「二つ」に分化し，絡み合っているようである。右側の木が母体で，大きな母体が左側の小さな木を抱きかかえているようにも見える。この 3 回目をどのように読み取るかは様々な解釈が考えられるが，例えば，孤独感から他者との強い結びつきを求めていたり，あるいは思春期の心理的自立のプロセスの中で，一時的に母性を強く求めていることの表れと読み取ることもできるだろう。その後，4 回目では再び一つとなり，1 回目と同じ「荒地」に生えた「やまもも」が描かれている。1 回目とは少し異なり，葉が枝に張り付いているように描かれているのではなく，

枝が「雲型の樹冠」によって覆われている。4 回目に関しては，「枯れるかも，切られるかも，残って欲しい」と期待が語られている。地面は大きく波打っており，不安定な印象である。しかし，高橋・高橋 (1986) は，「雲型の樹幹」は“①豊かな感受性，②丁重さ，③同調性を示すが，④空想に耽りやすく現実を逃避したり, ⑤月並で形式的に行動する傾向も表すようである”としている。なお，田山 (2008) では，「樹冠，葉，花，果実 (丸い樹冠) 」は，登校行動良好群で，登校行動不良群に比較して出現頻度が高いという結果が得られている。4 回目は，描画に示されたイメージもやや不安定ながらも木としてのまとまりを獲得していると言え, 3 回目で新たな自己像が生まれ (分化し), 4 回目で新たにまとまったイメージとして表現されたとの解釈も可能である。

以上より，事例 4 は，1 回目では社交的に周囲に関わろうと，やや無理をして自身を装飾しているようなバウムを描いていると言えるが，2 回目では自己が肥大化する。しかし，3 回目において，新たな自己像が生まれ，分化し，4 回目では，不安定ながらも適応的でまとまりを持った自己イメージを表現できるようになったと考えられる。



1 回目　　2 回目　　3 回目　　4 回目

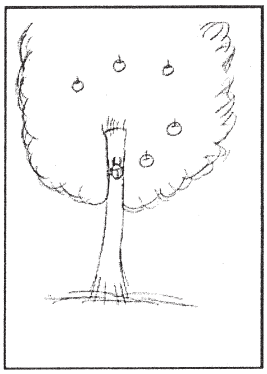
Figure 4. 事例 4 のバウムの経過 (再現)

<u>事例 5 (中学生，女子。Figure 5)</u>

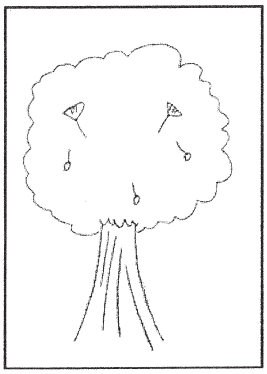
事例 5 は, 1 回目から 4 回目にかけて, 徐々に自然な形で幹と樹冠が繋がってきている。1 回目は，樹冠に比べて幹が細くなっている。高橋・高橋 (1986) は，樹冠の幅が大きくて「幹の幅が狭い木」は，感情機能が未発達であり，共感性に欠けることが多いとしている。また，付加物として虫 (幹に取り付いている) が描かれている。高橋・高橋 (1986) は，“子供はこれらの「小動物」や「昆虫」と自分自身を同一化し，家庭を木に象徴させていることが多く，これらは①依存性，②未成熟性を表すと考えられる”としている。2 回目では, 全体的に太く, 下にやや広がるような幹を描いている。3 回目では，用紙を横向きに用いて描いている。高橋・高橋 (1986) は，用紙を横にして描いた樹木画について，“①検査者や権威に対する無意識の反抗を示し，②自分の置かれた環境に不満を抱き，③自分を外界に合せるのではなく外界が自分に従うべきであると考える被検者のことが多い。したがってその性格が，①自己中心的であったり，②順応性を欠いていたり，③空想世界に逃避しやすかったりする”としている。しかし，3 回目のバウムを見ると，横に広がっているような印象も受け

る。高橋・高橋 (1986) は，“上部が平たくなり「横に広がった樹冠」は，外界からの圧力や過度の期待によって，自分の目標の実現が妨げられ，自分の能力を十分に発揮できないということや，外界からの圧力に屈従していると感じていることを表している”としている。外界からの圧力に不満を持ち，なんとかしたいという葛藤が表現されているようにも感じられる。4 回目では，2 枚目と同じような形のバウムを描き，さらに樹冠には付加物として鳥が描かれている。高橋・高橋 (1986) は，“「鳥」を描くのは，明るい気分や希望を表すことが多い”としている。

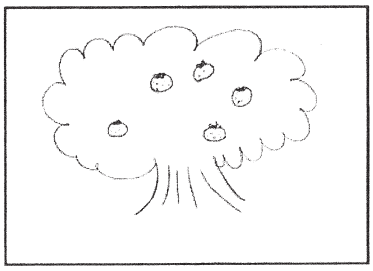
以上より，事例 5 は，1 回目から 4 回目にかけて，徐々に幹と樹冠の繋がりやバランスが整ってきており，知性と情動エネルギーの円滑な流れが緩やかになっていることが示唆される。3 回目で横向きに押しつぶされ，外界からの圧力への不満と，現状をなんとかしたいという思いの葛藤が表現されているようであったが，4 回目ではふたたびバランスをとりつつある。また，付加物も 1 回目は，「失敗」や「枯れ」，もしくは未成熟性を表すような「虫」であったが，4 回目では豊かな樹冠に丁寧な鳥が描かれ，精神内容が幾分豊かになっていることが推察される。情動エネルギーのコントロールの不十分さや，依存性，未成熟性から，現状に対する不満や葛藤を経て，安定した自己を形成するといった経過であるとも考えられ，思春期のプロセスから捉えることも可能であろう。



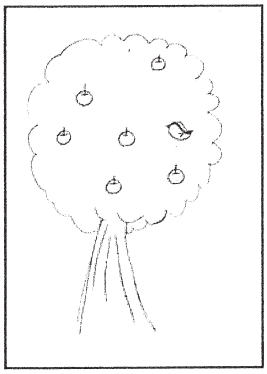
1 回目



2 回目



3 回目



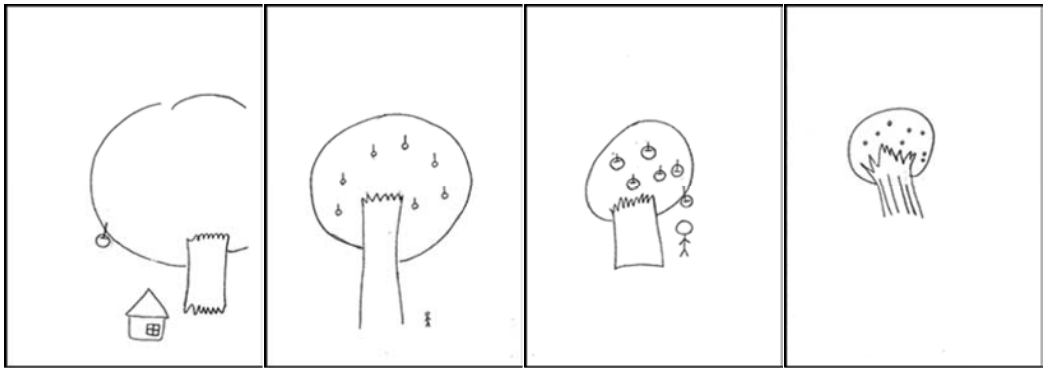
4 回目

Figure 5. 事例 5 のバウムの経過 (再現)

事例 6 (中学生，女子。Figure 6)

事例 6 では，1 回目では，真っ直ぐな幹に丸い樹冠であり，樹冠は右側が切断されている。また，付加物として「家」を描いている。高橋・高橋 (1986) では，「右側で切断された木」は，“①男性性の影響を強く受け，②過去 (女性性) から離れて未来 (男性性) に固着し，③感情よりも知的統制や理性的権威に支配される傾向があるが，用紙の左方で切断された樹木画と同じように依存的な面が目立つことが多い”とされている。2 回目では，1 回目と同じような形状のバウムを用紙の中心に描いている。幹は下方が開放しており，不安定な印象である。バウムの隣に「人」が小さく描かれており，バウムが非常に大きいことを示しているようである。「円形の樹冠」は子供に多く，精神発達の未成熟性を示しやすいとされている (高橋・高橋, 1986)。3 回目は，形状としては 2 回目に近いが，幹の根元だけを切断しているように描かれている。高橋・高橋 (1986) によると，このようなバウムは子供によく見られるとのことであるが，不安定であり，衝動を適切にコントロールすることが難しいような印象である。また，2 回目同様，バウムの隣に「人」が描かれているが，2 枚目よりもサイズが大きくなっている。4 回目も，これまでと同じような形状ではあるが，樹冠に比べて幹が明らかに太くなっている。幹は左に傾き，中には数本の縦線が描かれている。また，下方が開放している。高橋・高橋 (1986) は，“「左側に極端に傾斜している幹」は，①母親，女性性，過去，感情の影響の強さを示し，②抑圧の機制が強く，③自己に関心を抱いたり自己愛が強く，④活動するよりも空想や芸術などに興味が強い被検者に多い”としている。

事例 6 は，1 回目から 4 回目にかけて徐々に樹冠と幹の大きさが接近し，最終的には完全に幹優位となっていることや，樹冠の形状などから，全体として幼さが顕著であると言える。1 回目では右側で切断され，過去から離れ，未来を向いているような印象であった。しかし，全体的な幼さや依存性が伺え，徐々にバウムは左側へと移行していった。また，「木の外」に付加物を描くのが特徴的であったが，その付加物は，「家」から「人」となり，最終的には消失した。この家と付属物との描かれ方の変化に注目すると，1 枚目は家に覆いかぶさるように木が描かれ，家に対して木と実が不自然に大きい。2 枚目になると今度は人物に対して木が圧倒的に大きく，人物からは木に手が届かない。そして 3 枚目では木は縮小し，人物が大きく描かれ，人物は木に触れることができるバランスへと変化した。ここで描かれた木が自己像であるとするならば，付属物はそれとは別の自己の側面と捉えることができるだろう。1 枚目では大きな木として描かれた自己はいわば肥大化した自己像といえるだろう。そして未熟なまま肥大化した自己が家を圧倒している。あるいは弱い自己は家の中に引きこもり姿を現していないのかもしれない。2 枚目では，人物が現れるが，木に対してあまりにも小さい。この二つの対比からは，肥大化した自己像と卑小な自己像という極端な自己像を抱えていると読み取ることもできるだろう。そして 3 枚目になると，木と人物のサイズがつり合う。棒人間で描かれた人物はまだ未分化ではあるものの，肥大化した自己像と卑小化した自己像との間に交流が可能な状態になっている。そして 4 回目では木のサイズが小さくなり付属物は描かれなくなる。この 1 本の木に幼く不安定で傷つきやすい等身大の自己像へと表現が集約されたとも考えることができる。このように家と付属物との描かれ方の変化は，自己像の統合のプロセスと考えることができるのではないだろうか。



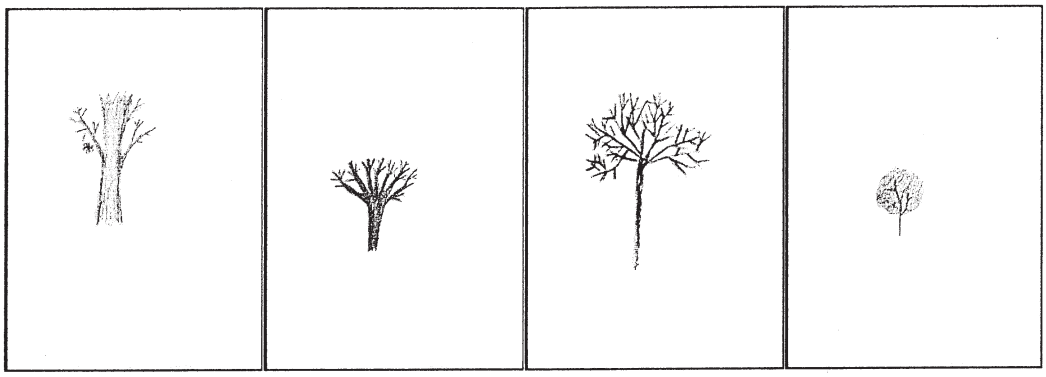
1 回目　　2 回目　　3 回目　　4 回目

Figure 6. 事例 6 のバウムの経過　(再現)

事例 7 (中学生、女子。Figure 7)

事例 7 は，全体を通じて，詳細に陰影が施されている。高橋・高橋 (1986) は，“「黒く塗りつぶした樹皮」は，①外界との接触に緊張感を持ち，②自己を防衛しようとして他人が自分の情緒面に近づくのを拒否する被検者に多く，③時には幼少期への退行傾向を示唆することもある”としており，対象者の不安の高さ，繊細さがうかがえる。1 回目では，幹はある程度太さがあるものの，幹の先端で折れてしまっているように描かれている。高橋・高橋 (1986) は，“幹は樹木の中心となる部分であり，①被検者の自我強度，②生命力，精神的エネルギー，内的衝動の流れ，③感情機能の働きを象徴している”としている。外界からの圧力を感じていたり，内的衝動を上手く統制できていない可能性が考えられる。2 回目では，1 回目よりも幹がさらに濃く塗りつぶされており，サイズも小さくなっている。3 回目では，色は薄くなり，サイズはやや大きくなっている。4 回目では再びサイズが小さくなり，幹も非常に細い。しかし，1 回目から 3 回目では，樹冠や葉がほとんどなく，枝がむき出しであったが，4 回目で初めて樹冠が描かれており，やや黒く塗りつぶされている。高橋・高橋 (1986) は，“「黒く塗りつぶした茂み」は，①被検者が防衛的に自己を隠そうとしているか，②抑鬱気分のために自己を正しく評価できなかったり，③自己中心的な引き込もり状態にあることを示しやすい”としている。不安や抑うつ的な状態ではあるものの，自己を外界から守ろうとする動きが見出されてきているとも考えられる。

以上より，事例 7 は，1 回目では，幹の先端はほとんどぽっきり折れており，3 回目までむき出しだった枝が，4 回目では丸い樹幹をもつようになるという変化を見せた。不安や抑うつ的な状態は変化していないが，「木」の歪みは少しずつ変化しバランスを獲得しており，外界との適度な距離を模索している最中であるとも考えられ，今後の変化が期待される。



1回目　　2回目　　3回目　　4回目

Figure 7. 事例7のバウムの経過 (再現)

以上のように，7 事例の「変化」の方向性は必ずしも一定ではなく，ポジティブな特徴が増大した事例，逆に縮小した事例 1，変化が微細で，対象児個人の特徴が 4 回通じて顕著に示唆された事例などがある。これらは，参加児がどのように里山体験を感じ受けとめているかという問題に加えて，彼ら／彼女らを取り巻く現実的な状況の変化や環境状態を視野に入れて解釈することが重要である。

これらの変化過程は，次の 2 つの視点から解釈することができる。第一は，継続実施された描画が，対象児の「内的変化」を表しているという視点，第二は，より防衛の取れた対象児の自己イメージ，つまり以前に表現された自己イメージとは別の側面を表現しているという視点である。後者に関しては，いわゆるバウムテストの「2 枚実施法」における効用として周知されているものである。目の前に広がる空間に，自由に自分を表現してよいという投映法検査は，想像以上に検査者の存在が大きく関与する。それが子どもにとって初対面の大人ならばなおさらのことである。対象児にとって，最初のバウムが初対面の他者に見せる「理想的」な自己像を表現している場合，その後の描画の変化は理想の仮面が外れた，その対象児の実像に近づいていると考えられる。事例 4 の経過などは，このような視点から解釈することも可能であろう。本研究のバウムの時系列的変化を解釈する上では，この第二の視点を重視する方が妥当であろうと考えられる。

しかしながら，参加児が回を重ねるにつれて，退行的な自我の姿をバウムに表現したことは，心理臨床的に見れば大きな意味を持っている。つまり，本当の自分を表現できることは，そこから発達の方向へ転換できることを示している。プログラムでの「楽しそうに見える」表面にあらわれた姿と，内的な自我の実相をつないでいくことが，今後の重要な心の作業となるであろう。

今回，4 回のプロセスの中で，各対象者の課題がバウムに表れていたと考えられる。例えば，事例 1 は，筆圧が弱く，田山 (2008) が示すような登校行動不良児童のバウムの特徴をよく表していると考えられた。一方で，事例 2 や事例 5 のように，思春期のテーマがバウムに表れていると解釈可能である事例もあった。事例 4 と事例 7 のように，外界との関わりのあり方が課題となっている事例もあった。しかし，事例 4 は外界に自己をどのように見せるのかということが課題であり，事

例 7 は外界からどのように自己を守り，その上で外界と関わっていくのかということが課題であると解釈することができた。事例 3 に関しては，「分離した幹」といった，自我の境界が曖昧な状態を示す指標も表れ，今後の経過を注意深く見て行く必要性も示唆された。

これまで，津田 (1992) をはじめ，川原他 (2006)，田山 (2008) など，不登校児童・生徒のバウムの特徴を統計的に検討した研究はいくつか存在する。そのような研究によって，不登校児童・生徒と，登校行動が良好な児童・生徒とのバウムの特徴の違いが，いくつかの指標において示唆されている。しかし，今回の研究において，バウムテストによって，不登校児童・生徒と，登校行動が良好な児童・生徒を比較するだけではなく，それぞれの不登校児童・生徒が，内的にどのような作業を行っているのかということを検討することが可能であることが示唆されたと言えるであろう。バウムテストを用いることで，それぞれに合った介入を考えることも可能であると考えられる。

4. 全体的考察

(1) 参加児の心的世界にとっての自然体験活動プログラムの意味

本研究の面接調査で得られたプログラムの感想に見られるように，参加児は楽しみに参加しており，それぞれのプログラムにも喜んで取り組んでいることが推察された。この点は非常に意義深いことである。ほぼ 2 カ月に一度，自然体験活動という非日常の世界に身と心をおき，楽しいと感じられることを一生懸命行うことは，心理学的に見ても参加児の心を育てる有意義な体験であろう。プログラムは，参加児の身体感覚がフルに活かせるように工夫されているという点で，日常生活では体験できないプラスの影響を与えていると思われる。

(2) バウムに見られる自我の実相と今後の課題

本研究で見出された主要な結果は，参加児の自我発達の予想以上の未熟さである。このような特質を示す子どもたちならば，学校のカリキュラムや行事，人間関係の中に身をおくことは相当なエネルギーを要するであろうと考えられる事例がほとんどであった。この結果に基づき，以下の点を本プログラムの今後の課題としたい。

第一は，プログラムの成果をあせらず，じっくり見守る姿勢が，指導者と保護者にとってきわめて重要である。枝や草のような木，地面に根付いていない木が，幹が安定し豊かな葉や実をつけた木に成長するには時間を要する。

第二は，子どもたちの発達にとっての自然体験活動ならではの心理的意味を理解し，それをプログラムやケアに活かすことである。本プログラムは意欲のある指導者とよく訓練された学生サポーターによって運営されている。自然そのものと，指導者とサポーターの創り出す温かな人間的環境が，参加児の心的世界における安定した「大地」となることが重要であろう。つまり学校には居場所がなく，本来，安心してありのままの自分を見せて居れるはずの家庭においても，十分に「自分」として生きることができない子どもたちにとって，自然体験の中で自分の五感を十分に働かせ，行動し，それが「自分」であるという自己感覚に気づくことは大きな意味をもっている。

具体的には，スタッフは，①子どもたちに暖かく柔らかな態度・言葉で接すること，②子どもたちの気持ちの表出・揺れを受容的に受けとめること (これら①・②は，学生サポーターにすでに身

についていると思われるが), ③がんばりや主体的な動きに注意を払い褒めること，④子どもたち一人一人のペースやがんばれる程度の個人差を理解し，その子どもに見合った主体性を認めることなどである。また，上記のように本プログラムへの参加児は，年齢よりもかなり自我の発達が未熟であり偏りも見られる。スタッフはこの点をよく理解し，一般的な心理的発達基準ではなく，それぞれの参加児の心理的発達にそったサポートやケアが必要である。そのためのアセスメントのツールとして，バウムテストが有効であるということが示唆されたことは，本研究の成果であると考えられる。

引用文献

岩宮恵子 (2009). フツーの子の思春期――心理療法の現場から――　岩波書店

川原恭子・田中英高・二宮ひとみ・玉井　浩・寺嶋繁典 (2006). 起立性調節障害を伴う不登校小児の樹木画　心身医学, **46** (2), 137-143.

Koch, K. (1957). *Der baumtest: der baumzeichenversuch als psychodiagnostisches hilfsmittel*. 3th ed. Bern: Verlag Hans Huber.

(コッホ, K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト――心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究――　第 3 版　誠信書房)

文部科学省 (2012). 平成 23 年度学校基本調査　文部科学省

高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト　文教書院

田山　淳 (2008). 中学生における登校行動とバウムテストの関連について　心身医学, **48** (12), 1033-1041.

津田浩一 (1992). 日本のバウムテスト――幼児・児童期を中心に――　日本文化科学社

山下真理子 (1982). バウムテストの発達的研究――樹冠と幹の発達的傾向および空間関係の描写について――　教育心理学研究, **30** (4), 23-28.